

言語を軸に
据え社会との
接点を考える

東京言語研究所 開設 50 周年記念 公開講座

東京言語研究所は、今年開設 50 周年を迎えました。50 周年を記念する公開講座では言語を軸に据え社会との接点を考えることを目的としています。

今回は下記の要領で開設 50 周年記念公開講座を開催いたします。奮ってご参加ください。

＜演題＞危機方言の記録と地域再生

一言語学に何ができるか

＜講師＞木部 暢子氏（国立国語研究所教授）

＜日時＞2016 年 6 月 18 日(土) 14:00～17:00

＜会場＞東京言語研究所（新宿区西新宿 6-24-1 西新宿三井ビル 13 階）

＜参加費＞一般 1,500 円 学生 1,000 円（当日学生証提示）

*2016 年度理論言語学講座受講生は 500 円 ※参加費は当日現金でお支払下さい。

＜申込み＞ホームページ申込みフォームもしくは FAX でお申し込みください。定数:60名

①公開講座受講希望 ②氏名 ③フリガナ ④性別 ⑤住所 ⑥電話番号 ⑦ E メールアドレス

⑧区分（2016 年度理論言語学講座受講生・一般・学生）⑨所属（大学生・大学院生・教員・会社員・その他）

（上記情報は東京言語研究所事業以外には一切使用いたしません。）

講師紹介

九州大学大学院文学研究科修士課程修了。博士（文学）。純真女子短期大学、福岡女学院短期大学、鹿児島大学を経て、2010 年より国立国語研究所教授。専門は日本方言学、音韻論、アクセント論。主な著書に、『西南部九州二型アクセントの研究』（2000、勉誠出版）、『そうだったんだ日本語 じゃって方言なおもしろとか』（2013、岩波書店）、『鹿児島県のことば』（共著、1997、明治書院）、『方言の形成』（共著、2008、岩波書店）、『日本語アクセント入門』（共著、2012、三省堂）、『方言学入門』（共著、2013、三省堂）、『シリーズ日本語史 1 音韻史』（共著、2016、岩波書店）など。

問合せ先

公益財団法人 ラボ国際交流センター
東京言語研究所

〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-24-1

西新宿三井ビル16階

TEL:03-5324-3420

FAX:03-5324-3427

ホームページ:<http://www.tokyo-gengo.gr.jp/>

【講義要旨】

世界で話されている約 6000 の言語のうち、100 年後も安泰な言語は 5～10% しかなく、残りの 90～95% は消滅する可能性があると言われていています (Michael E. Krauss 1992)。2009 年のユネスコの発表では、アイヌ語、沖縄・奄美の諸言語、東京都の八丈語が危機言語に指定されました。本土にも消滅が危惧される方言がたくさんあります。1 日も早くこれらの記録を作成し、次世代へ伝えていく取り組みを始めなければなりません。

しかし、中には「方言が消滅するのは時代の流れであって止めることはできない」「方言でしゃべっても他の地域の人に通じないから共通語の方がいい」という意見もあります。方言を次世代に伝える意義は何なのでしょう。

危機方言を調査していると、共通語だけ見ていたのでは気がつかない現象に出会うことがよくあります。例えば、鹿児島県の与論島で名詞の複数形「お爺さんたち」を尋ねると、2 通りの言い方が返ってきます。

(1) **ウプター**：お爺さん a+お爺さん b+お爺さん c+・・・

(2) **ウプター**：お爺さん+お婆さん+孫+・・・

(「ウプ」は「お爺さん」、「ター」は複数接辞、太字は高く発音する部分)

(1) は同類の人の集まり (正常複数)、(2) はお爺さんと彼に近い人の集まり (近似複数) です。共通語では 2 つをどちらも「お爺さんたち」と表現し、意味は文脈で決定しています。このように、危機方言はその方言だけでなく、日本語全体について考えるきっかけを作ってくれるのです。

ただし、方言を使うかどうかは地域の人が選ぶことで、外から強制するようなことはありません。そこで、研究者と地域の人との協力関係の構築が必要になってきます。研究者が方言の価値を地域に伝え、地域の人が方言を伝えたいという雰囲気を作り、その上で両者が協力して方言の記録や継承活動を行うといった関係です。すでにこのような取り組みを行っている沖縄県や八丈島の例を紹介しながら、言語研究が地域再生にどう貢献できるかについて考えたいと思います。



『ことばの宇宙への旅立ち—10代からの言語学』大津由紀雄編 好評発売中

第一線で活躍する言語学者自身の研究の紹介や言語学を志すきっかけなどのエピソードが盛り込まれています。発行：東京言語研究所／発売：ひつじ書房